

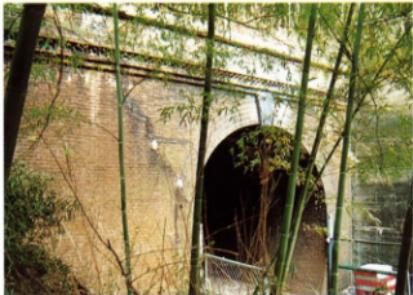
文化財基礎調査概報

—近代化遺産—



2000年3月

柏原市教育委員会



例言

- 1、本書は柏原市が実施した「文化財基礎調査」の概報である。
- 2、調査対象は、柏原市内に所在する近代化遺産である。
- 3、所在調査、本書の執筆、編集は柏原市教育委員会社会教育課石田成年が行った。
- 4、調査の実施、関連資料の収集、本書の作成等にあたり多くの方にご協力、ご指導を賜った。

記して謝意を表します。(順不同、敬称略)

・奈良大学 三木理史 ・JR西日本旅客鉄道㈱ 山根明治
・近畿日本鉄道㈱ 増田政俊 ・近鉄資料室 松村光洋 ・関西電力㈱ 安住貢志
・築留土地改良区組合 山本杉夫 大崎廣喜 ・国立科学博物館 清水慶一 久保田稔男
・吹田市立博物館 藤原学 田口泰久 ・横須賀市人文博物館 安池尋幸 菊地勝広
・大阪府狭山池ダム資料館準備室 有井宏子 ・(財)大阪府文化財調査研究センター 濑川健
・鉄道史学会 ・武藏大学 星野聰夫 ・高安城を探る会 ・岩永憲一郎 ・宮川良造
・竹下賢 ・柏原市古文化研究会 ・柏原市総務課 ・柏原市自治推進課 ・柏原市道路課

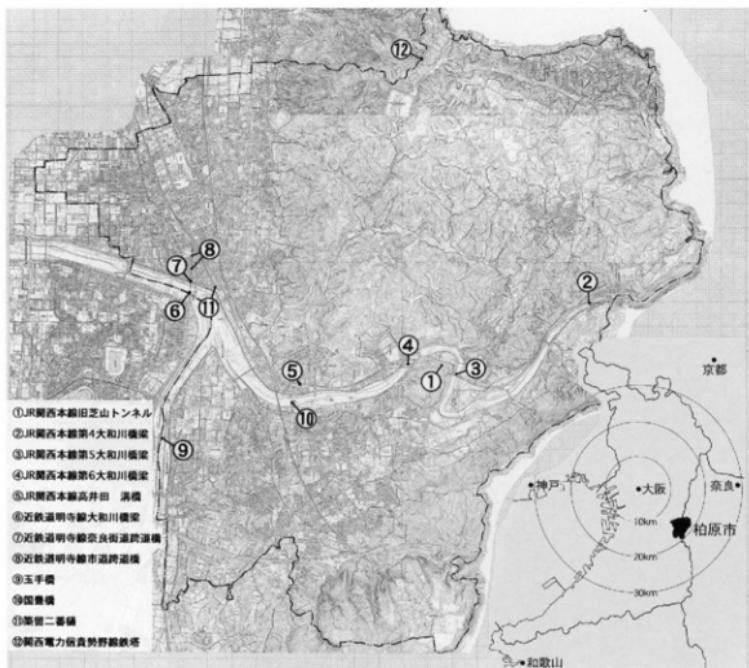
目次

1、調査の経過	1
2、所在物件	2
3、引用参考文献	17
4、まとめにかえて	18

1、調査の経過

文化庁は近代の遺跡について「文化財保護法による指定等の保護は進んでおらず、土地利用の変更や再開発により消滅の危機に瀕しているものが少なくない。わが国の近代の歴史を理解する上で欠くことのできない重要な遺跡について適切な保護をはかることが急務である」とし、1996（平成8）年度から8年計画で全国的な調査を始めた。幕末、開国頃から第二次世界大戦終結頃までが対象時期である。対象遺跡は政治、経済（さらに産業別に細分）、社会、文化、その他の分野に従い、区分される。そしてまず所在調査が実施され、そのデータを受けて検討委員会による詳細調査遺跡の選定、保存を要する遺跡の選定へと進められる。

小市においても文化庁と大阪府教育委員会の依頼と指導の下、所在調査を実施し、確認し得たデータ、関連資料を提出した。以下、大阪府教育委員会を経て文化庁に報告した内容を基調として、小市における近代遺跡の様相をまとめる。また文化庁の調査後、新に所在が判明したり内容がより知れたものも追加した。



分布図

2、所在物件

①JR関西本線旧芝山トンネル

分野 交通 駅道 (0504)

所在地 柏原市国分市場1丁目

所有者 西日本旅客鉄道株式会社

年代 1890 (明治23) 年

説明 旧大阪鉄道、柏原、龜ノ瀬（仮）間開通に合わせて建設されたトンネル。旧大阪鉄道のトンネルで唯一現存する。大阪方、奈良方両坑門の構造物全体はフランス積みレンガにより構築され、全国的にも稀少である。さらに大阪方坑門のアーチの上部にある帶石には装飾的な雁木を採用する。トンネル側壁は一般的なイギリス積みではなく、長手積みを採用するなど、特異な構造が随所に見られる。保存状態は良好で、目立った修復はされておらず、建設時のまま遺存する。1966（昭和41）年、湊町、奈良間電化工事に先立ち、別線に付け替えられ廃坑となる。現在は保線車両の通行路として使用されており、一般の立入は禁じられている。

現在の上り線（奈良行）のトンネルは1923（大正12）年に柏原、青谷信号所（河内堅上）間が複線化された際のもので、当時は下り線として使用されていた。



S=1/25000



大阪方坑門



奈良方坑門上部



帶石の雁木



奈良方坑門



トンネル内待避所ノ



奈良方坑門上部



奈良方坑門アーチ下部

② JR関西本線第4大和川橋梁

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市岬

所有者 西日本旅客鉄道株式会社

年代 1932 (昭和 7) 年

説明 1931 (昭和 6) 年に発生した大規模な亀ノ瀬地すべりにより、大和川北岸を貫く旧亀ノ瀬トンネルが崩壊し、翌年に不通となり、南岸に新線が迂回移設された（開通時は単線）。その際大阪方に架けられた橋梁である。列車が通るガーダーを支持するために、それと橋脚との間にプレートガーダーやワーレントラスが存在するという特異な構造である。確認できた銘板は「昭和五年」（現下り線大阪行）と「昭和九年」（現上り線奈良行）の2点で、新線建設年と一致しない。前者は、地滑り発生に伴い、急速貯蔵品を改造し使用したものとされ、後者は、後に開通した複線部に使用されたものである。

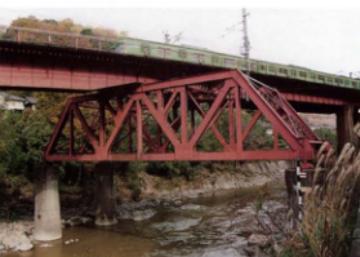


左：東方からの景観
右に見える家並は旧線跡



左下：橋梁西方のプレートガーダー

下：橋梁中央のトラス



③ JR関西本線第5大和川橋梁

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市国分市場 1 丁目

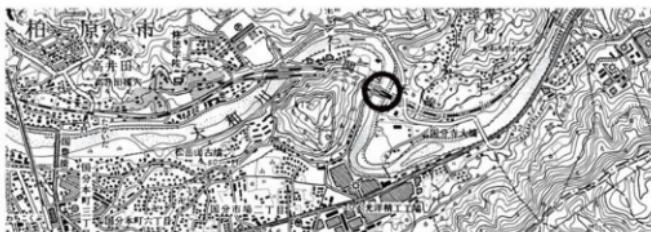
所有者 西日本旅客鉄道株式会社

年代 1890 (明治23) 年

説明 旧大阪鉄道、柏原、亀ノ瀬（仮）間開通に合わせて、芝山トンネルの東側に建設された橋。大阪方の橋台が遺存する。イギリス積みレンガにより構築される。1966 (昭和41) 年、別線に付け替えられたのであろうか。橋脚は現存しない。

現在の上り線（奈良行）の橋梁は1923 (大正12) 年に柏原、青谷信号所（現河内堅上）間が複線化された際のものと思われるが、銘板は確認できない。

『大阪鉄道略史』には、この橋梁の東側に「青谷隧道」が描かれているが、現在は切通となっており現存しない。1923 (大正12) 年の複線化に際し、撤去されたのであるうか。



S=1/25000



左から、現下り線、現上り線、旧線



茂みの中に残る大阪方橋台

④ JR関西本線第6大和川橋梁

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市国分市場1丁目

所有者 西日本旅客鉄道株式会社

年代 1890 (明治23) 年

説明 旧大阪鉄道、柏原、龜ノ瀬（仮）間開通に合わせて、芝山トンネルの西側に建設された橋梁。東西の両橋台が建設時のまま遺り、現在も上り線（奈良行）に使われている。構造物全体はイギリス積みレンガにより構築され、花崗岩製の隅石が用いられる。隅石間のレンガは6段。橋梁部は架け替えられており、1962年製の銘板が見える。現在の上下線の間にコンクリート製の橋台のみが遺る。1923（大正12）年の複線化の際の下り線であろうか。



S=1/25000



左：奈良方橋台



左下：大阪方橋台

下：現上り線橋梁の銘板



⑤JR関西本線高井田溝橋

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市高井田

所有者 西日本旅客鉄道株式会社

年代 1934 (昭和9) 年

説明 関西本線高井田駅の西方約100mにあるトラフガーダー橋である。長さ約100cmほどの溝橋に銘板が取り付けられ、「昭和九年」と判読できる。この区間が開通したのは1890(明治23)年、また複線化は1923(大正12)年であるので、架け替えによるものとわかる。



S=1/25000



架構状況



銘板

⑥近鉄道明寺線大和川橋梁

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市上市2丁目

所有者 近畿日本鉄道株式会社

年代 1898 (明治31) 年

説明 柏原・古市間を旧河陽鉄道が開業した際、建設された単線の橋梁。全長約200m。主桁側面には「COCHRANE&Co KAYORY DUDLEY ENGLAND」の銘板が遺る。「イギリスダッドリー」の「コクレーン社」が製作したものとわかる。「河陽鉄道」とあることから、開業時のものが今も使用され続いていることがわかり、近鉄全線の中でも最古の構築物ということになる。1937 (昭和12) 年、それまで円柱形の鋼材のみであった橋脚にコンクリートを巻き、強度を高めた。以後、目立った修復はされておらず、建設時のまま使用されていたが、1999年6月25日、大雨による大和川の増水で橋脚の根元が抉られ、数本が上流に傾いた。根元を固める工事が実施され、7月7日に一旦復旧し、さらにその後11月からは本格的な工事が実施された。現橋脚の周囲に仮橋脚を設置して橋梁を支持し、現橋脚を撤去の後、新しく橋脚を建設するというものである。その現橋脚撤去の際には開業時の鉄製橋脚が現れ、補強材として使用されていたレールに「G.H.H.1922」の刻印が確認できた。「ドイツ グーテンホフヒュッテ製」であろう。



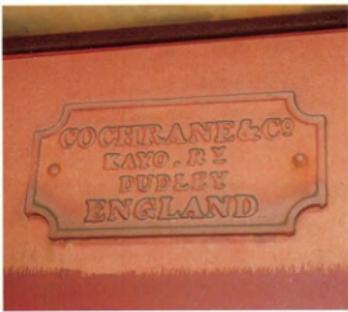
S=1/25000



全景（北から）



柏原方橋台



銘板



ガーダー内部



レールの刻印



ガーダーと橋脚の接合部



開業時の橋脚

⑦近鉄道明寺線奈良街道跨道橋

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市上市2丁目

所有者 近畿日本鉄道株式会社

年代 1898 (明治31) 年

説明 旧河陽鉄道、柏原・古市間開通に合わせて建設された跨道橋で、大和川橋梁の北、柏原南口のすぐ南である。国道25号線（奈良街道）を跨ぐ。橋台部にはイギリス積みを採用する。レンガの小口部分を焼き過ぎた「鼻黒（はなぐろ）」を使用し、長手に赤レンガを使用することにより、美しい縞状の模様を形成する。目立った修復はされておらず、建設時のまま使用する。橋梁部の詳細は不明である。



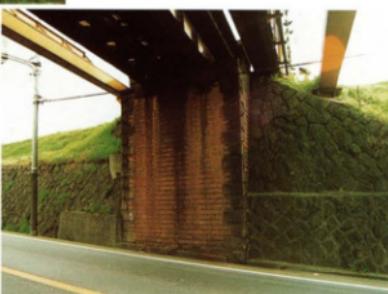
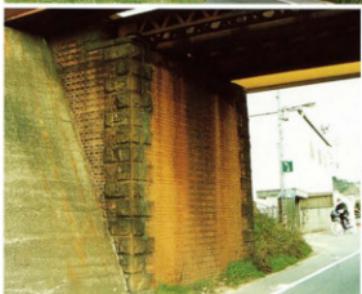
S=1/25000



左：全景

左下：柏原方橋台

下：道明寺方橋台



⑧近鉄道明寺線市道跨道橋（2ヶ所）

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市上市 2 丁目

所有者 近畿日本鉄道株式会社

年代 1898 (明治31) 年

説明 旧河陽鉄道の開通時に建設された橋梁で、柏原南口、柏原間に2カ所存在する。橋台部のレンガ積みがフランス積みである。いずれも幅の狭い道を跨ぐもので、線路と道は直交しない。そのため隅部の処理に工夫をこらし、突出部を切断したレンガの断面がピンク色を呈することにより、結果として装飾的効果が増している（黄色い部分は後の着色）。目立った修復はされておらず、建設時のまま使用する。橋梁部は何度か架け替えられているのであろうか。



S=1/25000



左：柏原南口方の橋



左下：柏原方の橋

下：隅部の状況



⑨玉手橋

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市石川町・玉手町と藤井寺市道明寺3丁目

所有者 柏原市

年代 1928 (昭和3) 年3月17日 架橋

説明 藤井寺市との市境をなす石川に架かる橋長151mの多径間吊橋で、日本最多径間の5径間吊橋として1928 (昭和3) 年に架橋された。主ケーブルがストランドロープ、ハンガーはターンバックルでピン装着、補剛桁は山形鋼を使ったボニー型ハウトラス、床組はRC床版である。下部構造はアンカレイジ、橋脚とも直接基礎のRC構造である。塔は上下の水平材に円弧アーチを配するなど、昭和初期の橋としては、景観に配慮したものである。昭和初期の形態をほぼ残しており、部分的にも損傷もみられるが、必要に応じて補修されている。最近では1984 (昭和59) 年にケーブルの補強工事が、また1998年には塗装補修が行われた。1908 (明治41) 年開園の玉手山遊園地への途上にあり、同様に親しまれたが、その遊園地も1998年に廃園となった。



左：全景（東南から）
左下：支柱
下：床組



⑩国豊橋

分野 交通 橋梁 (0503)

所在地 柏原市高井田、国分本町

所有者 建設省

年代 1932 (昭和 7) 年

説明 柏原市大和川に架かる国道25線の橋。延長は約200m。大阪と奈良を結ぶ奈良街道の中間地点として栄えた国分村のすぐ北にあり、江戸期には渡しにより通行していたが、明治期になり橋が架けられた。現在の橋には「株式会社大阪鐵工所製作 昭和七年」の銘板が確認できた。架設当時の写真からは親柱には装飾灯が、橋上にも照明灯が取り付けられていたことを知ることができる。その痕跡が車道と歩道を画するコンクリート製の欄干に残る。歩道は後に増設されたもので、銘板には「1966年3月 製作日立造船株式会社桜島工場 材質SS41」とある。近年の交通量増加に伴う渋滞緩和のため、1999年11月27日、東側（上流側）に新橋が架設された。



S=1/25000



左：全景（北から）
左下：銘板
下：照明灯の痕跡



①築留二番樋

分野 農林水産業 農業 (0701)

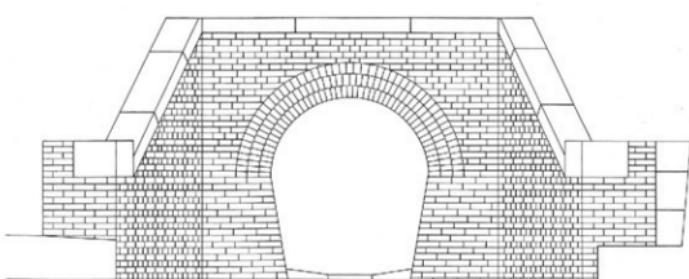
所在地 柏原市上市3丁目

所有者 築留土地改良区

年代 明治末期～大正？

説明 奈良盆地の水を集めた大和川は大阪平野に流れ込んだ後、北西方向に流れている。それが現在のように堺方向に付け替えられたのは1704（宝永元）年のことである。この樋門は旧川筋の一つである長瀬川に取水するものである。

レンガ造りのアーチ型樋門で、アーチ部の最大幅は157cmを測る。基本的にイギリス積みを採用し、面壁の下半のみ長手積みとする。アーチの断面は側壁が垂直ではなく、鉄道トンネルのように馬蹄形を呈する。目地は山形目地を意図していると思われる箇所が見られる。各壁の天端には花崗岩が載せられ、床面にも花崗岩が敷かれている。内部は薬剤注入やコンクリートにより補強されており、原状を保つのは坑門部分のみである。



正面実測図 (S=1/50)



全景



アーチ下部



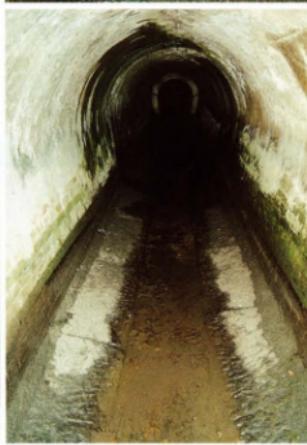
近景



アーチ下部



翼端



水路内部

⑫関西電力信貴勢野線鉄塔

分野 エネルギー産業 その他 (0205)

所在地 柏原市本堂

所有者 関西電力株式会社

年代 1930 (昭和 5) 年

説明 八尾市から柏原市、奈良県生駒郡三郷町を経て生駒郡平群町へ達する送電線、信貴勢野線の鉄塔で柏原市内には5基所在する。地上から高さ約3mに取り付けられたプラスチック製プレートには「建設年月 昭和5年9月」と記されている。関西電力によると建設年が記録されている鉄塔の中でも最古級に属するという。部材には社印や「200×200 SEITETSUSHO YAWATA ヤワタ」の刻印があり、「八幡製鉄」製であることがわかる。電力供給の増強と安定をはかるため、1998年から建て替え工事が実施されている。



上：プレート 下：刻印

全景

3、引用参考文献

- 1955 大和川付替二百五十年記念顕彰事業委員会 『治水の誇り』
- 1976 三郷町 『三郷町史』
- 1980 原田勝正 他 『明治期鉄道史資料』 第2集第3巻
- 1987 西城浩志 『大阪鉄道・覚書(4)』 『鉄道史料』 第45号
- 1987 亀井一男 『地図と鉄道(15)』 『鉄道史料』 第46号
- 1988 INAXギャラリー 『れんがと建築』
- 1988 藤井信夫 『近鉄南大阪線形成の経緯』 『関西の鉄道』 No.19
- 1988 奥田晴彦 『関西本線亀の瀬隧道のことなど』 『鉄道史料』 第52号
- 1989 三木理史 『関西大手私鉄の煉瓦建築』 『鉄道ピクトリアル』 No.519
- 1990 小野田滋 『関西本線のトンネルを訪ねて』 『鉄道ピクトリアル』 No.536
- 1990 中川浩一 『関西本線成立の経緯』 『鉄道ピクトリアル』 No.536
- 1993 舞鶴市赤れんが博物館 『赤れんが物語』
- 1993 小野田滋 『れんがの魅力』 『土と基礎』 Vol.41, No.5
- 1994 小野田滋 『鉄道用れんが構造物の見方・調べ方』 『鉄道ピクトリアル』 No.586
- 1994 成瀬輝男 編 『鉄の橋百選』
- 1995 『八尾・柏原の100年』 刊行会 編 『目で見る八尾・柏原の100年』
- 1995~2000 宮脇俊三 編 『鉄道廃線跡を歩く』 I~VII
- 1996 埼玉県教育委員会 『埼玉県の近代化遺産』
- 1996 小野田滋 他 『鉄道構造物におけるフランス積み煉瓦の地域性とその特徴』 『国立科学博物館研究報告』 第19巻
- 1997 竹田辰男 『関西本線の11ヶ月「I」』 『鉄道史料』 第87号
- 1997 竹田辰男 『関西本線の11ヶ月「II」』 『鉄道史料』 第88号
- 1998 竹田辰男 『関西本線の11ヶ月「III」』 『鉄道史料』 第89号
- 1998 竹田辰男 『関西本線の11ヶ月「補遺」』 『鉄道史料』 第91号
- 1998 関西鉄道研究会 『関西の鉄道』 No.36
- 1998 浅野明彦 『鉄道考古学を歩く』
- 1998 文化庁歴史的建造物調査研究会 『建物の見方・しらべ方 近代土木遺産の保存と活用』
- 1998 文化庁歴史的建造物調査研究会 『建物の見方・しらべ方 近代産業遺産』
- 1999 小野田滋 『わが国における鉄道用煉瓦構造物の技術史的研究』

4、まとめにかえて

所在が確認された物件については交通、通信に関わるものが多い。明治維新以後、それらが日本の近代化の担い手で、必要不可欠な要素であったことは言うまでもなく、公共性の高い分野という特性からも常に最新技術が導入され、より耐久性が高く、より強固で、より大型であるということにも起因しよう。しかしさるに明確にしたいことは、それらが関与することにより小市特有の文化や産業がどのように「近代化」され変化したのかということである。鮮明に地域史を彩ってきた小市の文化、産業に関わる資料の掘り起こしにも努めていきたい。

こうした「新しい文化財」の調査は小市においては緒に就いたところであり、不明な点がまだ多い故、今般の調査では対象物件の所在確認に留まった。前章に掲げた引用参考文献をはじめ諸先学の業績に負うところが多いながらも、理解の不足から、本書でもそれぞれの工学的な構造上の詳細や地域の歴史的背景との関連には及んでいない。また文中で使用した名称や用語等についての誤用、史実の誤認もあるらかと思われる。さらに詳細が確認できない物件もあり（近鉄大阪線大和川橋梁、築留橋、南栄橋等）、今後も所在調査を進める中でより充実させたいと思う。ご指摘、ご教示を願うものである。

報告書抄録

ふりがな	ぶんかざいきそちょうさがいほう
書名	文化財基礎調査概報
副書名	近代化遺産
巻次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	1999-Ⅲ
編著者名	石田成年
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555 大阪府柏原市安堂町 1-43
発行年月日	2000(平成12)年3月31日



文化財基礎調査概報

—近代化遺産—

編集・発行 柏原市教育委員会

印 刷 (株)中島弘文堂印刷所

発行年月日 2000年3月31日